

(要約版)

## インドネシア・西スマトラにおける換金作物ガンビールの生産と流通に関する

### 人類学的研究

助成研究者 西川 慧 (東北大学大学院・文化人類学)

#### 1. 研究目的

本研究の目的は 2 つある。第一に、インドネシア西スマトラ州における換金作物ガンビール (*uncaria gambir*) の生産開始によって、調査村落の経済・社会関係がどのように再編されつつあるのか明らかにすることである。第二に、調査村落における生産活動を、インドをはじめとする世界経済の流れのなかに位置づけることで、ガンビールの生産と流通がいかなる政治経済的条件のもとで生起してきたのか明らかにすることである。

ガンビールとは、高さがおよそ 1 メートル 50 センチほどの、アカネ科カギカズラ属の植物である。その葉からとれるタンニンが染料に使われたり、日本では阿仙薬と呼ばれ、正露丸の原料にも使われたりしている。西スマトラ州では、オランダによる植民地支配以前からガンビールが生産されている。生産されたガンビールは、中国へ輸出されて嗜好品「ビンロウジ」の原料のひとつとして使用されたり、ヨーロッパにおいて皮なめしに使われたり、ジャワ島へ送られろけつ染めの染料として使われていた。ただし、本研究が対象としたテルック・ダラム村(仮名)で、ガンビール栽培が開始されたのは 1996 年のことであった。生産されたガンビールの大部分は、インスタント版のビンロウジ「パン・マサラ」(*pan masala*) の原料とするためにインドへと輸出される。2008 年頃からガンビールの買取価格は徐々に上がりはじめ、テルック・ダラム村の生産者たちは多額の現金収入を得ることになった。特に 2016 年には、ガンビールの買取価格がさらに高騰し、「ガンビール・ブーム」というべき状況が生まれていた。このガンビール・ブームはなぜ起こったのであろうか。また、ガンビール・ブームによって村の経済関係と社会関係はどのような影響を受けたのだろうか。

#### 2. 研究方法

本研究ではインドネシア西スマトラ州パシシル・スラタン県のテルック・ダラム村におけるフィールドワークを行った。テルック・ダラム村は母系親族体系で知られるミナンカバウの村である。まず、これまで収集したデータと聞き取りにもとづいて、ガンビール・ブームに至るまでの村の社会経済史を整理した。続いて、ドローンを用いて調査村落におけるガンビール畑の地図を作製した。特に注目する 2 つの地区を選定し、当該地区に畑を持つ人びとを対象に、世帯経済状況と土地保有状況を明らかにするた

めの世帯調査を行った。村の社会経済史との関連から世帯調査の結果を分析することで、ガンビール耕作の開始が村びとたちの経済・社会関係にどのような影響を与えたのか明らかにした。続いて、都市部に住んでいるインド人のガンビール仲買人、および輸出入に関わるインドネシア政府の役所における資料収集とインタビューを通して、2016年から続くガンビール買い取り価格の高騰の原因を明らかにした。

### 3. 考察と結論

インドネシア独立前後から1970年代までのテルック・ダラム村では相次ぐ紛争の戦地となったために、それまでの換金作物耕作を営むことができなくなり、生存経済へと傾いていった。1970年代からは現金収入の必要性が高まり、人びとは木材の切り出しやマレーシアへの出稼ぎを行うようになったが、それも売買の対象となる樹木の枯渇や移民規制政策のために難しくなっていく。そこに登場したのがコーヒーやシナモンであり、そしてガンビールであった。村びとたちは多額の現金収入を求めて開拓を行ったというよりも、生活に必要な現金を求めて森林を開拓していった。

ガンビール耕作の開始は、生存のための水田稲作の周縁化をもたらし、貨幣経済への依存を高めた。その結果、水田で行われていた母系親族での共同作業も衰退していった。また、かつての生業活動は人生儀礼のサイクルと結びついてきたが、常に多くの労働力が必要なガンビール耕作の導入により、人生儀礼のサイクルから分離していった。

ただし、これは必ずしも母系親族関係の重要性が低下したことを意味しない。ガンビール畑の開拓は母系親族関係を起点として行われていた。特に重要なのは、特定の母系親族の女性と婚姻した男性たちのネットワークである。妻方居住が一般的なミンカバウでは、これらの男性たちが隣同士に暮らしており、妻の母系氏族への経済的貢献を求められているからであろう。なかでも最初の開拓者と近い人びとは広い土地を手にするようになった。そして、彼らこそがガンビール・ブームで多額の利益を得た人びとである。一方で、畑を持たない人たちとの経済格差は大きくなっていった。

世帯調査の結果を注視すると、生産者たちの多くが母系親族関係にある仲買人から借金をしていることが明らかになった。その見返りとして、生産者たちはこの仲買人へガンビールを売却する契約を口頭で結ぶ。生産者たちの視点から見ると、ガンビール畑の更なる拡大のために現金が必要なとき、および医療費や学費の支払いなどに困った際に頼ることができる相手として仲買人を見ていた。仲買人たちは、生産者が他の仲買人のもとへ移ってしまうことを恐れており、先行研究で指摘されていたような返済を強く迫ったり土地を接収したりするような事例は見られなかった。ガンビール耕作の拡大を支えていたのは、このような仲買人と生産者のパトロン＝クライアント関係であった。母系親族関係は、水田での共同作業を担う水平的な関係から、最初の開拓者を中心とした男性たちのネットワークへ、そして仲買人を中心として貸付金によ

って結びついたパトロン＝クライアント関係へと変質していったのである。

それでは、ガンビール・ブームはどのようにして引き起こされたのだろうか。少なくとも、2010年までの第一次ガンビール・ブームは、それまでインドでパン・マサラのために一般的に使用されていた *katha* からガンビールへと移行したために引き起こされたことが明らかになった。すなわち、*katha* の製造のために引き起こされていたインド国内での森林減少を防ぐために、インドネシアのガンビールを多く使用するようになったのである。しかし、残念ながら2016年以降の第二次ガンビール・ブームが引き起こされたメカニズムに関しては十分に明らかにすることができなかった。この点については、今後の課題としたい。